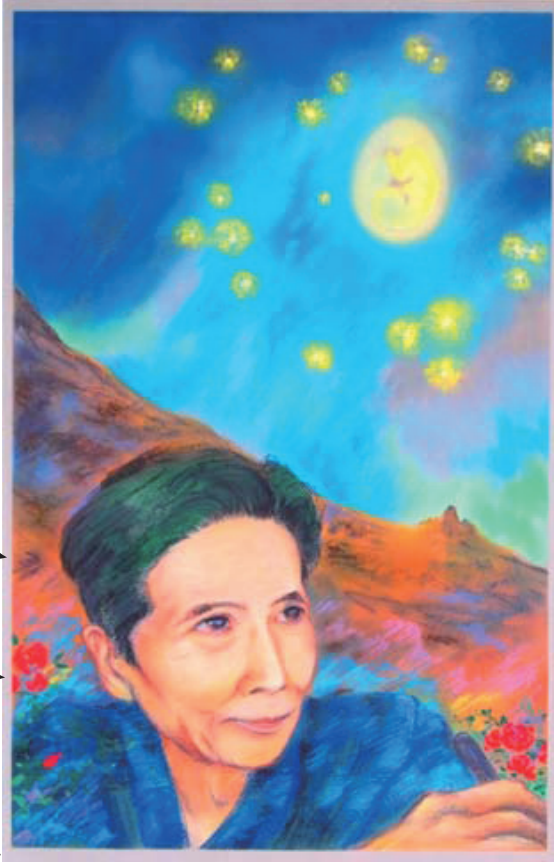


冬の谷間の記録

(1)



鈴木 与一

冬の谷間の記録（一）

鈴木 与一

序

長篇小説「冬の谷間の記録」は、第一章から第六章までの全三巻からなりま
す。著者・鈴木与一は闘病生活の中で小説を七作書上げました。この小説は主
治医から余命二年と宣告され、自らの死を覚悟して書かれた作品です。

主人公・賀来皓一（かくこういち）は、昭和初期に生れ、上州の農家の長男
として戦中・戦後の貧しい暮らしを経験して育ち、高校卒業後に郷里を離れます。
そしてE大学で学究の徒としてスタートを切りますが、一九五〇年代という
激動の東京を舞台に、革命運動に身を投じることになります。主人公は、戦中・
戦後を経て戦争の実体を知り、再び二度と戦争を起こしてはならないと決意し
たからです。燃えたぎる思いを持ちながら、学問を捨てて突き進む主人公に、
幾度となく苛酷な試練が襲いかかります。若者たちの運命は如何に……。

昭和二十五年からの十年間、日本は敗戦後の復興を目指しながら様々な歴史

を刻みました。この小説の時代背景を大まかに見てみますと、社会面では第一回紅白歌合戦やプロ野球テレビ初放映がありました。大阪では日本初の高層建築物が完成し、広島では平和記念公園が完成されています。また東海村原子力研究所が発足し、日本初の原子炉が東海村に出現しました。片や、第五福竜丸被曝事故が起り、第一回原水爆禁止世界大会が行なわれました。政治面では、レッド・パージが始まり、朝鮮戦争が勃発し、日米安保が締結され、破壊活動防止法が施行されました。そして五十五年体制と呼ばれる、自由党と日本民主党の合同による自民党が結成されました。旧ソ連では世界初の人工衛星の打ち上げに成功し、科学の力は宇宙というマクロと原子というミクロに進み始めました。同時に政治思想の世界的な対立が生れ、日本では左翼や右翼による様々な闘争や事件が起こり、大学生達による社会運動や政治的活動も激しさを増して行きました。そのような時代でした。

(す)

※ 専門的な用語や難解と思われる熟語は、巻末に引用し解説をつけました。

第一章

萌え出る芽

五頁〜一三五頁

第二章

冬の旅立ち

一三六頁〜二一〇頁

第一章

萌え出る芽

晩春のやわらかな陽射しがガラス窓を通して教室にさしこんでいる。賀来皓一こういちの座席は窓際だから、光をいっぱい浴びて、いくぶん眠気を誘われていたことも確かである。グランドには人影もなく、彼は鉛筆の尖端で歯をほじくりながら、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

「おい！ その歯くそをほじくってる奴」

数学担当のガチ——横田教師のことを生徒はそう呼んでいたのだが、そのガチが、陰気な、妙に押し殺した声で云った。始めのうち、彼はそれが自分に向けられた言葉であるのを理解できずに、ぼうつとしていたが、クラスの仲間が注目しているのを知ってうろたえた。ガチと狂犬に気をつける、何しろ凄いのだから——中学へ入学したばかりの賀来たちに対して先輩が口々に教えてくれたその言葉が、一瞬彼の心を鋭く貫き、恐怖心がふくれあがる。彼は頭や胸のあたりがしんと冷え、それからかあっと熱く燃えたつのを感しながら、

「はいっ」

と慌てて立ちあがった。机の蓋がボタンと大きな音をたてる。

「おまえ、何処を見ていた。鉛筆でよう、齒くそなんかほじくりながらさ」
ガチは角張った貧相な顔に、皮肉つぽいうすら笑いを浮べている。しかしその眼は笑っていない。蛇を連想させる、意地悪く、残忍な光を帯びている。

「ちよつと来い！」

ガチは、ガチ棒と生徒たちが呼んでいる五十センチばかりの、よく撓しなう竹の棒で手招きの仕草をした。彼がどれほど狂暴で恐ろしいか、噂で充分知りつくしていたから、来るべき予感に賀来は震えあがり、顔面蒼白となったまま、足も地につかぬといった有様で教室の前に進み出ると、体を硬直させて直立不動の姿勢をとった。

「いまがどういう時局か知っているだろう」

「……」

「えっ？」

「はい、知っております」

「知っている？それでは云ってみろ」

「……」

「戦局は急を告げている。いまこそ鬼畜米英に、禪ふんとしを締めなおして、一億一心火の玉となって、大和魂の真価を見せつけてやらねばならない。そういう時局にだな、授業中に齒くそをほじくって脇見をしている。勉強に身をいれていない！ そんな態で聖戦を完遂できるか。戦地の兵隊さんに何んとお詫びをする気だ。ああん。いま、おまえが注意を受けている。そのために十分間授業が潰れれば、このクラスの五十人が十分づつ遊ぶんだ。合計すれば実に五百分、八時間以上を無駄にした計算になる。そうだろうが！」

「……」

賀来は唇を噛みしめ、黙然とうつつ向いている。おかしな計算の仕方だな——そんな思いが、ちらっと彼の胸をよぎった。

「賀来、この不始末の責任をどうとる積りだ」

賀来の体がぴくんと震えた。

「まあいい、柱神様に聞いて来い」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。